

ブリテンは『クラブの窓』

クラブブリテン(以下ブリテン)は、基本的には、クラブの内部機関誌です。ですから、自分たちの主張を世に問うというものではありませんし、文芸作品の外部への発表の場でもありません。メンバーの社会問題に対する主張や、作句、写真の掲載もありますが、これもあくまでも内部向けのものです。

ですから、組織が健全に成長していくための多少、手前味噌な記事や、善意ある批評や励まして盛り上げる部分があります。

主張や感想が含まれる原稿には、主語である書いた人の名を記すことになります。しかし、慶事などで、「心からお喜び申し上げます」とか、行事の紹介で、「ぜひ参加してください」、あるいは「会費の納入はお早目に」という記事で、署名がないのは、発行責任者であるクラブ会長の発言、またはクラブの意志ということになります。

他方、ブリテンは「クラブの窓」として、外部との窓口の性格も持ちます。自分たちのクラブの情報を外部に発信し、また、ブリテンを交換することによって外の新鮮な空気を取り込みます。

高かったブリテンのIT化への関心

区大会には、交流や親睦とともに「学び」の要素があります。「学び」とは、単に講演とかディスカッションといった狭い意味ではなく、幅広くとらえた方が良いと思います。

2003年、宇都宮で開催された第6回東日本区大会(小山正直区理事・東京まちだ)での、テーマ別のワークショップの中に、『IT化ブリテン』がありました。これには、予想に反して参加者が多く、席が足りなくなって、ホストクラブを慌て

させました。

この分科会では、パソコンを利用して、いかにしてブリテンを作るか、といった技術面よりも、インターネット(IT)が、媒体として、「紙」に代わり得るかということが、参加者の関心でした。それは、クラブにとって、ブリテン発行に伴う費用が大きな負担だったからです。

その時点での協議の方向は、将来的には紙媒体に置き換わる可能性はあるが、読む側の心理、習慣から、当分は併用せざるを得ないというものでした。

ブリテンにかかる費用

当時、個々のクラブにとって、ブリテンのために支出する費用は大きな負担でした。

通常、4ページのブリテンをタイプ印刷で200部、印刷すると、紙代を含めて1万円以上かかりました。これを封筒に入れ、メンバー、部や区の役員、他クラブなどに100部送ると、郵便代他で、1万円ほど、合計すると2万円、年間で約24万円となりました。メンバー数人分の年会費がブリテン費用のために消えてしまいました。

これに編集や発送の手間などを考えると果して、ブリテンは、支出に見合う価値があるのだろうかという、疑問もありました。

ブリテンの意味

ブリテンには次のような意味があります。

- 報道的な意味
- 広報的な意味
- 親睦的な意味
- 交流的な意味
- 報告的な意味

記録的な意味
啓蒙的な意味
文化的な意味

あまり、面白くありません。それならば、自分のクラブにどのような効用があるかを挙げてみましょう。

ブリテンの具体的な効用

クラブのメンバーには、だれも平等に「知る権利」と「知る義務」があります。形として残るブリテンは、それを助ける有効な手段です。

自分の役割が見えてきます。

優れたリーダーの強いリーダーシップのもとにクラブが運営されることは、素晴らしいことですが、会話だけでは、情報が偏り、リーダーが中心にかかわれない事態が起こると、その時点で、クラブが立ち往生してしまうことがあります。

これを防ぐには、日頃から文字媒体によって情報が共有、共感、共鳴されていることが大切です。

東京目黒クラブは、この10年ほど、会員数が10人を切っています。しかし、クラブとしての骨格はしっかりして、例会にも多くのビジターやゲストを迎えています。これはブリテンがきちっとしているからでしょう。4頁建ての紙面には、例会案内、卓話者紹介、行事予定、行事報告、メンバーの感想などが配されています。ですから、メンバーが自分の役割を意識しています。

深く理解できるようになります。

対話によるコミュニケーションは大事ですし、説得力もあります。しかし、文字と組み合わせることも大切です。論理の飛躍や矛盾、検討のモレが見つかります。記憶に頼らず、記録を確認することによって、改善していくことができます。以心伝心の仲良しクラブは、意外にもろいのです。

クラブの中に外の情報を入れます。

国際や、区、部などの情報は、さまざまな形で入ってきます。それを自分たちのクラブの視点で

紹介することによって、メンバーが親近感をもって、立体的に情報を理解することが出来ます。

クラブの外に出ていくメンバーをバックアップします。

ブリテンによって、そのクラブにどんな人がいて、どのような活動をしているかが、他のクラブに伝わります。評議会など、クラブを超えたイベントに参加するとき、クラブの情報が発信されていると、初対面の人とも早く親しくなれます。

周囲の関心の中で、活動することが出来ます。

他人から認められても、認められなくても、やるべきことはやるのがワイズメンですが、注目を浴びながら仕事をするのも、気分の良いものです。超満員の球場でプレーするのと、閑古鳥が鳴く消化試合では気合いの入り方が違います。また、より多くの人との協力を得ることが出来ます。話題を提供することもクラブ活性の大切な要素です。

区や部に対する提言が出来ます。

区や部が行う行事や事業についてのブリテンでの報告は、それぞれに対するモニターの役割を果たし、結果的に、反映されることにもなります。

外部に対する宣伝ツールになります。

1枚のブリテンであっても、クラブを紹介したり、例会に誘おうとした時に、あるとないとは大違いです。相手も質問がしやすいでしょう。

ブリテンが長い間に、クラブに良いものをもたらすことは間違いありません

ブリテン表彰もいいけど・・・

区は毎年、区大会において、優秀なブリテンや発行に努力しているクラブを表彰します。理事表彰ですから、名誉ある賞です。

しかし、区では、どれだけクラブがブリテンを発行していないか、を把握出来ていません。

店頭陳列される商品には、バーコード(POS

マーク)が印刷されていて、販売店は、その気になれば、どういう客層が、どういう時間帯に購入したかなどを分析することが出来ます。ところが、買わない客のデータはとれないのです。

同じように、ブリテンを発行していないクラブや、発行しても発信していないクラブの情報を区は得ることができないのです。

ブリテンがクラブのMCに大きな影響を与えるにもかかわらず、区にも部にも、ブリテンを育成したり、助言したりする担当役員がいないのは、不思議なことです。

これまで、ブリテンの掲載事項への注文や指導はありましたが、編集、発行面でのアドバイスは行われた記憶はありません。

私の知る限り、唯一の例外は、2001 - 2002年度の伊丹一之・国内担当事業主任(東京むかで)でした。設立された東京たんぼぼクラブのためにブリテンの雛形を作り、国際加盟するまで、つききりで指導し、軌道に乗せて新クラブの担当者に引き継ぎました。

ブリテン発行の壁、3つの「ない」

ブリテンの編集・発行が難しいと思われるのは、次の3つの「ない」でしょう。

費用がない

編集する人がない

原稿が集まらない

ブリテン発行が容易になった

上記の「ない」は、パソコン(PC)などの機器の普及によって、かなり解決してきています。

まず、費用は、大幅に下がりました。版下制作までをPCで行い、インターネットで送信すれば、若干の個人負担はあるだけで、費用はゼロに近いのです。印刷する場合でも、メンバーが簡易印刷機でやれば、モノクロなら数百円どまりです。費用がブリテンを発行しない理由にはなりません。

次に、編集者の問題です。ワイズのブリテンの

編集は、それほど難しくはないのです。また、以前と比べて随分楽になっています。

編集企画：ワイズの活動は、毎月、毎年、ほとんど同じことをやっているのですから、企画に悩むことがないのです。踏襲でいけるのです。

原稿依頼と催促：これは少々厄介ですが、PCのお陰で、依頼するにしても、断るにしても、催促するにしても、顔を見ないで事務的に行うことができます。原稿のやりとりもPCやFAXでやるとスピーディーに、事が運びます。

レイアウト：以前は、原稿の文字数を数えて、レイアウト用紙に割り付ける作業が大変でした。PCを使えば、前月と同じ枠に原稿の軽重で順番を決めて流し込むだけです。文字数の多寡は、削除、挿入で自在に加減できます。

校正・印刷：PCで完全原稿を作っておけば、校正の必要がなく、時間が短縮できます。自分で印刷する場合は、緊急の変更にも対応できます。依頼するにも、便利な印刷ショップが増えました。

編集は、編集委員会で協議しているクラブ、編集者一人に任せているクラブなど、事情によってさまざまです。

私のクラブの東京西クラブの場合は、編集担当のAさん、Bさんが隔月で企画と原稿集めを行い、Cさんが入力・レイアウトをします。さらにDさんが印刷して、Eさんが発送しています。

最後は原稿が集まらないということですが、30年くらい前に比べると、報告する事項は多くなっています。ネタはあるのに、原稿になっていないだけです。

ブリテンの文章は、美文でも名文である必要がありません。分かりやすく、飽きずに早く読めることが大切です。事実を中心に、形容詞抜きで固有名詞と動詞を並べるだけで良いからと原稿依頼しましょう。そのことで、結果的には、書く側にとって書きやすく、読む側にとって読みやすいものになります。

また、原稿の依頼は、早め早めにします。例会が終わってから、例会報告を頼まれたら、誰だっ

て困りますし、断る口実を与えるようなものです。

他クラブのブリテンの見どころ

クラブのブリテンは、それぞれ特長があります。どれも工夫していますから、どれをとっても参考になります。ここで紹介するのは、良いブリテン悪いブリテンという評価ではありません。見どころのポイントです。

東京西クラブは、まず開封してもらうために、封筒の表に「今月のハイライト」を印刷していません。開封されたブリテンは、すぐに読んでもらいたいです。ところが、多くのブリテンは三つ折りになっていて最初に目が行くところが、クラブ名や聖句、標語・主題などで見飽きた風景です。もりおかクラブは、ここに短い聖句を大きな太文字で入れて、インパクトを持たせています。

東京サンライズクラブ、東京八王子クラブは、どちらかというところ「参加記」中心です。東京まちだクラブは細やかな工夫があります。

クラブ独自に事業を数多く持ち、ニュースの多い甲府クラブは、原稿のぜい肉を削ぎ、一部は活字のサイズを下げて、4頁に収めるように変えました。簡潔にまとめる参考になります。

沼津クラブは、インターネットで受信をした時に読みやすいように紙面を1段組みにし、文字のポイントも大きくしています。東京クラブは、不特定多数に見られることを考慮してインターネット用は、別版を作っています。

宇都宮クラブは、IBC用にロシア語のブリテンも作ります。東京セントラルクラブは、IBC向けの英語のコーナーを設けています。東京クラブも英語版を作っています。

究極の2頁建てのブリテンは、東京北クラブのブリテンでしょう。薄紙で、短い原稿が配置されて箱庭のようなブリテンです。国際大会があろうと2頁建てのパターンを崩しません。皆で書き、だれもがブリテンエディターをやるようにという意図でしょう。考案者は、同クラブの故神谷信弥さん。余談ながら、今年、創業130年を迎えた浅草の名店「神谷バー」のオーナーでした。簡

単には変えないということが、永く続ける秘訣かもしれません。

今や、ブリテン編集は、苦勞はありますが、難しい専門的なことではなくなっています。ぜひ、ブリテン作りに積極的に取り組んでいただきたいと思います。

あとがき

ある大学病院の小児病棟のトイレに貼り紙があり、「さいごに、かみを使わないと、おわったことにならないのだよ」と書かれていました。本当は、子どもに、お尻をちゃんと拭きなさいという意味なのですが、若いドクターにとっては、どきっとすることだったようです。いつも教授から、診療結果をレポートにまとめておくように指導されているからです。

やはり、クラブも活動記録を「紙」にまとめておくことが大切だと思います。

またまた個人的なことになりますが、私は、東日本区が始まった1997年から区の役員会の末席にいました。日本区時代も何回か区役員やクラブ会長を務めましたので、これまでに毎月、沢山のブリテンを読むことができました。

素人ながら、だんだん目が肥えてきて、「あっ、うまいな」とか、自分が出来るかどうかは別として、「もう少しだけ工夫すれば」などと思うようになりました。そんなことから、2005年に『印刷媒体としてのクラブブリテン編集の手引き』（A4版34頁）をまとめました。

今、見直すと、冗長であり、パソコン全盛時代には、時代遅れの感があります。でも参考のために見たいという方には、メールの「添付」で送らせていただきます。

Bulletinを日本では、「ブリテン」とカナ書きしています。いつからかは分かりません。1960年の日本区大会のプログラムには「ブリティン・コンテスト」となっています。世間一般では、「ブレティン」という方が多く、「ブリテン」は、他の意味にとられることが多いようです。